

研究ノート

明治の「生意気娘」たち（上）

——「女学生」と小説——

小 関 三 平

明治の男女は、個性が鮮明で行動力に溢れ、「女丈夫」が多く輩出した。幕末生れて新時代の女子教育を担った人たちも、スケールが大きい。彼女たち自身は、一部を除けば、まだ「女学校」創生以前の私塾で学ぶしかなかったが、やがて新世代の「女学生」を育てることになる。

意気に溢れた初期の女学生も、個性強烈で、ときに奔放だった。そこで、物議をかもしすこともあり、事件が起きると、新聞は誇張または歪曲して、女学校を揶揄ないし非難をした。その大きな波は、少なくとも二度ある。話題の女学生（あがり）をモデルとした有名な小説も、幾つか書かれた。女教師や舎監の類も登場する。

旧風の親と教師の望みに逆らって、やがて「閨秀作家」まで現われた。才能を生かす機会に恵まれぬ娘たちに、小説は貴重な自己表現の場を与えたが、本を読むだけで「生意気」とされたから、進学にもまして親と周囲の反対は強い。だから、「事件」の主は、もっぱら、作家志願か、作家に恋した娘たちだった。

だが、「洋行紳士」と同じく、「女学生」もまた「開化」の象徴だった。また、それゆえ、欧化→国粹、女権→婦徳、民権→国権への流れに、捲き込まれもした。小説家は、その姿をどう見て、どう描いたのだろうか。

この小稿の関心と素材は、まず、次頁の年表の人物・事項に、その輪郭が示される。

明治の「生意気娘」たち(上)

明治 女傑年表	(年号)	1 (1868)	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
		明治	学	西	教	国	鹿											
		治	制	南	育	会	鳴											
		維	制	の	令	開	館											
		新	定	役		設	開											
		(生年)																
税所敦子 1825									○									
矢島 梶子 33																		
跡見花蝶 40																		
中島歌子 41																		
三輪田真佐子 43																		
佐々城豊寿 53																		○
下田歌子 54																		
桜井ちか 55																		
坪内逍遙 59																		
森鷗外 62																		
二葉亭四迷 64																		
尾崎紅葉 67																		
山田美妙 68																		
北村透谷 68																		
国木田独步 71																		
田山花袋 71																		
島村抱月 72																		
島崎藤村 72																		
岩野泡鳴 73																		
与謝野鉄幹 73																		
泉鏡花 73																		
小栗風葉 75																		
近松秋江 76																		
有島武郎 78																		
永井荷風 79																		
相馬黒光 76																		
与謝野晶子 78																		
佐々城信子 78																		
森田草平 81																		
志賀直哉 83																		
北原白秋 85																		
石川啄木 86																		
谷崎潤一郎 86																		
萩原朔太郎 86																		
平塚らいてう 86																		
神近 86																		
菊池寛 88																		
白井喬二 89																		

明治の「生意気娘」たち(上)

年	出来事	出版・発行	その他
18		『小説神髓』	
19	教科書検定の条例	『浮雲』	華族女学校開校
20	保安条令	『女鑑』 発刊	『国民之友』 発刊
21	帝国憲法発布	『日本人』 発刊	『国民之友』 発刊
22	教育勅語	『女鑑』 下賜	『都の花』 発刊
23	教育勅語	『小公子』	『文学界』 発刊
24		『女鑑』 発刊	『早稲田文学』 発刊
25		内村鑑三不敬事件	『文学界』 発刊
26		日本基督教婦人矯風会設立	
27	日清戦争勃発	『たけくらべ』	
28		『文芸倶楽部』 発刊	
29		『新小説』 復刊	
30	男女別学の訓令	『閨秀特集号』	
31		『金色夜叉』	
32	私立学校令	『不如帰』	
33	治安警察法	『己が罪』	
34		日本女子大学開校	
35		女子英字塾開校	
36	国定教科書	愛国婦人会設立	
37	日露戦争勃発	『魔風恋風』	
38		平民社設立	
39		日本YWCA設立	
40		『世界婦人』 発刊	
41	戊申詔書	『破戒』	
42		『春』	
43	韓国併合	『三田文学』	
44	大逆事件判決	『白樺』 発刊	
		『人形の家』 初演	
		高等女学校の読書取締り	
		『婦人之友』 発刊	
		『青鞥』 発刊	
		『蒲団』	
		『煤煙』	
		『明星』 発刊	
		『墮落女学生』 問題	
		『都の花』 発刊	
		『国民之友』 発刊	
		『早稲田文学』 発刊	
		『文学界』 発刊	
		『閨秀特集号』	
		『新小説』 復刊	
		『文芸倶楽部』 発刊	
		『たけくらべ』	
		『金色夜叉』	
		『己が罪』	
		『魔風恋風』	
		『破戒』	
		『春』	
		『三田文学』	
		『白樺』 発刊	
		『人形の家』 初演	
		高等女学校の読書取締り	
		『婦人之友』 発刊	
		『青鞥』 発刊	
		『煤煙』	
		『蒲団』	
		『明星』 発刊	
		『墮落女学生』 問題	
		『都の花』 発刊	
		『国民之友』 発刊	
		『早稲田文学』 発刊	
		『文学界』 発刊	
		『閨秀特集号』	
		『新小説』 復刊	
		『文芸倶楽部』 発刊	
		『たけくらべ』	
		『金色夜叉』	
		『己が罪』	
		『魔風恋風』	
		『破戒』	
		『春』	
		『三田文学』	
		『白樺』 発刊	
		『人形の家』 初演	
		高等女学校の読書取締り	
		『婦人之友』 発刊	
		『青鞥』 発刊	
		『煤煙』	
		『蒲団』	
		『明星』 発刊	
		『墮落女学生』 問題	
		『都の花』 発刊	
		『国民之友』 発刊	
		『早稲田文学』 発刊	
		『文学界』 発刊	
		『閨秀特集号』	
		『新小説』 復刊	
		『文芸倶楽部』 発刊	
		『たけくらべ』	
		『金色夜叉』	
		『己が罪』	
		『魔風恋風』	
		『破戒』	
		『春』	
		『三田文学』	
		『白樺』 発刊	
		『人形の家』 初演	
		高等女学校の読書取締り	
		『婦人之友』 発刊	
		『青鞥』 発刊	
		『煤煙』	
		『蒲団』	
		『明星』 発刊	
		『墮落女学生』 問題	
		『都の花』 発刊	
		『国民之友』 発刊	
		『早稲田文学』 発刊	
		『文学界』 発刊	
		『閨秀特集号』	
		『新小説』 復刊	
		『文芸倶楽部』 発刊	
		『たけくらべ』	
		『金色夜叉』	
		『己が罪』	
		『魔風恋風』	
		『破戒』	
		『春』	
		『三田文学』	
		『白樺』 発刊	
		『人形の家』 初演	
		高等女学校の読書取締り	
		『婦人之友』 発刊	
		『青鞥』 発刊	
		『煤煙』	
		『蒲団』	
		『明星』 発刊	
		『墮落女学生』 問題	
		『都の花』 発刊	
		『国民之友』 発刊	
		『早稲田文学』 発刊	
		『文学界』 発刊	
		『閨秀特集号』	
		『新小説』 復刊	
		『文芸倶楽部』 発刊	
		『たけくらべ』	
		『金色夜叉』	
		『己が罪』	
		『魔風恋風』	
		『破戒』	
		『春』	
		『三田文学』	
		『白樺』 発刊	
		『人形の家』 初演	
		高等女学校の読書取締り	
		『婦人之友』 発刊	
		『青鞥』 発刊	
		『煤煙』	
		『蒲団』	
		『明星』 発刊	
		『墮落女学生』 問題	
		『都の花』 発刊	
		『国民之友』 発刊	
		『早稲田文学』 発刊	
		『文学界』 発刊	
		『閨秀特集号』	
		『新小説』 復刊	
		『文芸倶楽部』 発刊	
		『たけくらべ』	
		『金色夜叉』	
		『己が罪』	
		『魔風恋風』	
		『破戒』	
		『春』	
		『三田文学』	
		『白樺』 発刊	
		『人形の家』 初演	
		高等女学校の読書取締り	
		『婦人之友』 発刊	
		『青鞥』 発刊	
		『煤煙』	
		『蒲団』	
		『明星』 発刊	
		『墮落女学生』 問題	
		『都の花』 発刊	
		『国民之友』 発刊	
		『早稲田文学』 発刊	
		『文学界』 発刊	
		『閨秀特集号』	
		『新小説』 復刊	
		『文芸倶楽部』 発刊	
		『たけくらべ』	
		『金色夜叉』	
		『己が罪』	
		『魔風恋風』	
		『破戒』	
		『春』	
		『三田文学』	
		『白樺』 発刊	
		『人形の家』 初演	
		高等女学校の読書取締り	
		『婦人之友』 発刊	
		『青鞥』 発刊	
		『煤煙』	
		『蒲団』	
		『明星』 発刊	
		『墮落女学生』 問題	
		『都の花』 発刊	
		『国民之友』 発刊	
		『早稲田文学』 発刊	
		『文学界』 発刊	
		『閨秀特集号』	
		『新小説』 復刊	
		『文芸倶楽部』 発刊	
		『たけくらべ』	
		『金色夜叉』	
		『己が罪』	
		『魔風恋風』	
		『破戒』	
		『春』	
		『三田文学』	
		『白樺』 発刊	
		『人形の家』 初演	
		高等女学校の読書取締り	
		『婦人之友』 発刊	
		『青鞥』 発刊	
		『煤煙』	
		『蒲団』	
		『明星』 発刊	
		『墮落女学生』 問題	
		『都の花』 発刊	
		『国民之友』 発刊	
		『早稲田文学』 発刊	
		『文学界』 発刊	
		『閨秀特集号』	
		『新小説』 復刊	
		『文芸倶楽部』 発刊	
		『たけくらべ』	
		『金色夜叉』	
		『己が罪』	
		『魔風恋風』	
		『破戒』	
		『春』	
		『三田文学』	
		『白樺』 発刊	
		『人形の家』 初演	
		高等女学校の読書取締り	
		『婦人之友』 発刊	
		『青鞥』 発刊	
		『煤煙』	
		『蒲団』	
		『明星』 発刊	
		『墮落女学生』 問題	
		『都の花』 発刊	
		『国民之友』 発刊	
		『早稲田文学』 発刊	
		『文学界』 発刊	
		『閨秀特集号』	
		『新小説』 復刊	
		『文芸倶楽部』 発刊	
		『たけくらべ』	
		『金色夜叉』	
		『己が罪』	
		『魔風恋風』	
		『破戒』	
		『春』	
		『三田文学』	
		『白樺』 発刊	
		『人形の家』 初演	
		高等女学校の読書取締り	
		『婦人之友』 発刊	
		『青鞥』 発刊	
		『煤煙』	
		『蒲団』	
		『明星』 発刊	
		『墮落女学生』 問題	
		『都の花』 発刊	
		『国民之友』 発刊	
		『早稲田文学』 発刊	
		『文学界』 発刊	
		『閨秀特集号』	
		『新小説』 復刊	
		『文芸倶楽部』 発刊	
		『たけくらべ』	
		『金色夜叉』	
		『己が罪』	
		『魔風恋風』	
		『破戒』	
		『春』	
		『三田文学』	
		『白樺』 発刊	
		『人形の家』 初演	
		高等女学校の読書取締り	
		『婦人之友』 発刊	
		『青鞥』 発刊	
		『煤煙』	
		『蒲団』	
		『明星』 発刊	
		『墮落女学生』 問題	
		『都の花』 発刊	
		『国民之友』 発刊	
		『早稲田文学』 発刊	
		『文学界』 発刊	
		『閨秀特集号』	
		『新小説』 復刊	
		『文芸倶楽部』 発刊	
		『たけくらべ』	
		『金色夜叉』	
		『己が罪』	
		『魔風恋風』	
		『破戒』	
		『春』	
		『三田文学』	
		『白樺』 発刊	
		『人形の家』 初演	
		高等女学校の読書取締り	
		『婦人之友』 発刊	
		『青鞥』 発刊	
		『煤煙』	
		『蒲団』	
		『明星』 発刊	
		『墮落女学生』 問題	
		『都の花』 発刊	
		『国民之友』 発刊	
		『早稲田文学』 発刊	
		『文学界』 発刊	
		『閨秀特集号』	
		『新小説』 復刊	
		『文芸倶楽部』 発刊	
		『たけくらべ』	
		『金色夜叉』	
		『己が罪』	
		『魔風恋風』	
		『破戒』	
		『春』	
		『三田文学』	
		『白樺』 発刊	
		『人形の家』 初演	
		高等女学校の読書取締り	
		『婦人之友』 発刊	
		『青鞥』 発刊	
		『煤煙』	
		『蒲団』	
		『明星』 発刊	
		『墮落女学生』 問題	
		『都の花』 発刊	
		『国民之友』 発刊	
		『早稲田文学』 発刊	
		『文学界』 発刊	
		『閨秀特集号』	
		『新小説』 復刊	
		『文芸倶楽部』 発刊	
		『たけくらべ』	
		『金色夜叉』	
		『己が罪』	
		『魔風恋風』	
		『破戒』	
		『春』	
		『三田文学』	
		『白樺』 発刊	

この年表は、女性史と学校史と小説史をつなぎつつ、同時に著名な人物の生活史を重ねている。二兎を追ってさえ一兎は得られないとすれば、四兎を追うことの限界は、初めから明らかである。

ここでの主たる関心は、明治女性の新しい人間像にあるが、女学生（あがり）のすべての実生活は知る由もないから、小説にも素材を頼ることになろう。たとえば、明治小説の女学生像と聞けば、誰しも、まず『蒲団』を思い浮かべるが、モデルの岡田美知代は、『みだれ髪』が出た頃、神戸女学院の寄宿舎に居た。『煤煙』のモデルの平塚明（→らいてう）は、その2才下で、東京女高師付属高女に通っていた。『或る女のグリンプス』のモデル・佐々城信子は、二人よりは少し年長で、『文学界』発刊の頃、海岸女学校（→青山女学院）の寄宿舎に居たはずである。だが、モデル小説に限らず、明治文学史のあちこちに、女学生（あがり）の姿が見え隠れする。そもそも、「小説の近代化」を画したとされる『浮雲』のお勢にしても、英語を会話に挿む女学生なのだった。

但し、〈女学生物〉とも呼ぶべきものが相次いで人気を博したのは、『紺暖簾』・『魔風恋風』・『青春』などが読売新聞に連載された30年代である。だから、ここでは、一般の文学史では「通俗小説」として軽視または無視された作品も、掘り起こされる。それらへのここでの視線は、文学史家の既成の評価からは自由だし、むしろ積極的に忘れられた作品を拾い出そうとさえ努める。

そこで、さしあたり、第1表に掲げた30作品を取り上げてみよう。基準は、主人公またはその相手役を、「女学生」または「女学生あがり」（女学校の中退者・卒業生）とすることに、作者が或る意味を与えている——という点にある。『眞美人草』・『婦系図』・『春』が含まれないのは、その理由からだし、『女の一生』・『安曇野』・『森』も、昭和の作品として、この表では省かれている。

もちろん、小説はモデルがあるとしても仮構を伴うし、作者の主題は恣意性を、その観察は主観性をまぬがれないから、文化史にとっては素材の一部たるに止まる。当然のことながら、社会史・風俗史・教育史・思想史によっても、補なわれねばならない。だがまた、作家の態度・視線と読者や「世間」のそれ

明治の「生意気娘」たち（上）

第1表 女学生小説の年表

19年（1886）	妹と背かがみ 雪中梅 一颯一笑 新粧之佳人 庭訓 籠飼の黄鸝（→雛黄鸝）	坪内逍遙 末広鉄腸 須藤南翠 ”
20年（1887）	蕨 椿 女子参政 蜃中楼 薔薇の香 浮雲	饗庭篁村 広津柳浪 月の舎しのぶ 二葉亭四迷
21年（1888）	蕨の鶯	三宅花圃
22年（1889）	婦女の鑑 細君 くされたまご	木村曙 坪内逍遙 嵯峨の屋 お室
23年（1890）	嫁入り仕度に教師三昧	山田美妙
27年（1894）	わが恋	石橋思案
28年（1895）	医学修業	田沢稲舟
29年（1896）	しろばら	”
31年（1898）	くれの廿八日	内田魯庵
32年（1899）	己が罪	菊池幽芳
33年（1900）	紺暖簾	山岸荷葉
35年（1902）	地獄の花	永井荷風
36年（1903）	魔風恋風	小杉天外
38年（1905）	青春 わらはの思ひ出	小栗風葉子 福田英子
39年（1906）	其面影	二葉亭四迷
40年（1907）	蒲団	田山花袋
41年（1908）	三四郎 空薫	夏目漱石 大塚楠緒子
42年（1909）	煤煙	森田草平
44年（1911）	或る女のグリンプス あきらめ	有島武郎 田村俊子

※『虞美人草』・『婦系図』・『春』は、女学生・女学校出身者が中心ではないので、対象外とする。

らにも、時代はなにがしか反映しつつ、しかも、しばしば互いに背き合う。その重なりと距たり、相関と相剋に、時代のダイナミズムが表現される。

I.

「新しい女」という流行語は、『青鞥』発刊の前年に、イブセンらの近代劇を論じた坪内逍遙の大阪講演が、そのきっかけだった。その文脈は、平塚らいてうのそれと同じではないが、女権拡張の言わば歴史的必然を、冷静に見つめるものだった¹⁾。New Woman は、10年余も前の欧州世紀末に登場していたのである。

だが、青鞥派に脅威を感じた大正期の新聞が、この語を用いた時は、好奇心な視線と半ば揶揄的な調子を伴った。恋人の喉^{のど}を刺した『東京日日新聞』記者・神近市子(5年)も、若い恋人の許へ走り、鉾山^{のど}の夫への絶縁を新聞に公表した柳原燐子(白蓮)(10年)も、夫ある身で妻ある作家と心中した『婦人公論』記者・波多野秋子(12年)も、世間を驚倒させる新しい女だった。市子は活水女学校を出て女子英学塾に入り、雑誌に寄稿し、『青鞥』に参加し、津田梅子に東京を去れと言われ盛岡で教え、華族の白蓮は、望まぬ結婚に破れたのち24才で東洋英和学校に入り、かたわら歌人となった。秋子は、実践女学校を出て中年男の後妻となってから、女子学院と青山学院を共に終え、『国民新聞』の懸賞募集にその教育論が当選した。いずれも、粒選りの才媛にして元「生意気娘」だった。

大正の世間を騒がした彼女たちは、明治35年には、それぞれ、14、17、9才であり、岡田美知代や平塚明と同じく、「海老茶武部」と呼ばれた世代なのであり、三者の最年長たる白蓮は、田村俊子の1才下、岡田美知代や野上弥生子と同年、らいてうより1才、市子より2才、岡本かの子(←大貫)より3才年上である。

「武部」とは、紫武部や和泉武部に因んだ才媛の比喩で、「海老茶」は、30年代後半の女学生の間で流行した袴の色を指した。彼女たちは、しばしば、髪を

リボンで飾り、手にパラソルを携えもした。男袴は「女らしさ」に反するためか、10年代後半の「欧化」時代と20年代の「国粹保存」の「反動」期を通じて、一旦は消えていたが、30年代に女物の「あんどん袴」が現われ、とりわけ海老茶色のそれが、宇都宮高女を発生源として、たちまち流行・普及したのが、33年だった²⁾。前年に、ベルツが帯の不健康を指摘したことも関係があるろう。だが、華族女学校で袴の機能性を推賞してきた下田歌子は、これを擁護した。

興味深いことに、三宅花圃（←田辺龍子）の夫・雪嶺（雄二郎）が自らの『日本人』誌で、これまた新流行語たる「ハイカラ」を論じたのも³⁾、女学生を主人公とする『読売新聞』連載の三連作の第1弾——『紺暖簾』（山岸荷葉）が現われたのも、女子英学塾の発足も、そして、20世紀が始まったのも、実はこの年である。

もちろん、「海老茶式部」なる呼称も、一種のひそかな驚きと敬意を伴ないはずれ、多分に揶揄的なものだった。現に、30年代前半には、20年代半ばを上回る批判・酷評・中傷の大波が、女学生・女学校を襲い⁴⁾、公然と「男女交際」をしただけでも、たちまち「墮落式部」と非難されかねなかった。

『明治式部』なる題の、一種の女学生概論とも言うべき小冊子（B5判・126頁）が現われたのも、この頃、35年である。著者は菅野枕浪、版元は仙台となっている。堺女学校出身の歌人・鳳しょう（→晶→^{おき}晶子）が、出奔・上京して、妻子ある師の許に身を寄せ、『みだれ髪』が若き男女の魂をゆさぶり、同時に、新設の日本女子大学が話題となったその翌年だった。

「社会は人為的の有機団体にあらずや、女学生は社会の要素にあらずや。而かも如何にして理想の社会を得べきか、之れ千古の疑問ならずや。如何にして理想の女学生を得べきか、此れ、現代の疑問ならずや」——上記小冊子の冒頭の一節である。文体はいささか古めかしすぎるが、この書が珍しいのは、女学生の「正面」・「側面」・「裡面」、「実力」・「虚力」を区別し、それと結社・節操・情・恋愛・文学・家庭・音楽・優美・結婚・宗教の関係をそれぞれ論ずる章を含み、全部で20章からなり、一見したところ、多面的・分析的な装いを

持つ点である。

但し、残念ながら、「述る處四分五裂」と自認する通り、論理に綻び多く、吟味は粗雑だし、東京の有名版元から出たわけでもないことも加わり、女子教育史には書名さえ現われない。ただ前年の『女学生』（佐藤竹蔵）から『女子教育』（38年、下田次郎）、『女性学』（39年、菊池秋叟）に至るまで、さまざまな女子教育論が雑誌を賑わし書物ともなった30年代を象徴する点では、一顧に値するとは言えよう。

喧びすしい海老茶式部論の背景には、30年代における女学生の急増があった。35年の公立高等女学校は80校、生徒数21,523人で、10年後には3倍以上の7万5千人に達するが、10年前に較べれば実に7.5倍増である。官公立の高等女学校が始めてできた明治15年には5校・286人だったことを思えば、わずか20年間の変化はいちじるしい⁵⁾。さらに、28年の高等女学校規程、32年の高等女学校令によって制約されたため、あえて各種学校の地位に止まったがレベルの高い基督教系学校もあり、各種の実科女学校も多いから、広義の女学生は、上の数字を大きく上回ることになる。

II.

ところで、「女学生」という語は、今ではほとんど死語に近いが、常識的には「女子学生」とも異なり、第二次大戦前には、小学校を終えた後の中等教育機関としての「高等女学校」の生徒を指した。その前提は、男女の「別学」であり、戦前の「中学校」は男子のためのものだった。

が、中等教育の体系が生れる以前の明治初頭では、女学校は、女子のための初等教育機関であり、また、その意味の女学生は、女学校の生徒とも限らない。なぜなら、12年の「教育令」まで、小学校が最初は共学だったからである。年令もさまざまであった。「塾」と「学校」との区別も、なかった。すべては、「寺子屋」の延長だったのであり、寺子屋に通う女兒は、意外に多かったのである。その点については、石川謙・乙竹岩造・土屋忠雄らの詳しい研究がある⁶⁾。

「女学校」を提唱したのは、幕末の吉田松陰だった。意外に見えるが、実はそうでもない。憂国の松陰は、「母の教え」こそ、国の将来を左右すると、考えたのだった。儒者であった以上、女性解放を説くわけもないし、士族の娘しか念頭にないが、「女は無学なるがよし」とする「女大学」よりは進歩的である。アメリカへの密航を企てたぐらいだから、仮りに松陰が女兒を教えたとすれば、話は「儉勤貞静」の教えに止まらず、世界の動静に及んだかもしれない。

幕末の騒がしい雰囲気は、一部の娘たちの血をも騒がせたはずである。幕末の女傑は、高杉を助けて流された望東尼や、志士たちを助けた祇園の女たちだけではない。幼い頭山満に強い印象を残した高場乱は、塾を営み、男装して刀を腰に帯びていたし、のちに『或る女』のモデルを産んで未婚の母となる星とよ（→佐々城豊寿）は、娘時代に男装して仙台市中を馬で乗り回していた。明治の女子教育史や文芸史に名を残す矢島楯子、桜井ちか、中島歌子、大山捨松、下田歌子、津田梅子、鳩山春子、若松賤子、福田英子らは幕末の生れで、サムライの血が流れていたのである。

だから、女学生の元祖は「蛮カラ」と呼ばれた。「洋学女生」の姿を伝える『新聞雑誌』の明治5年の記事には、「男子ノ用ユル袴ヲ着シ、足駄ヲハキ、腕マクリナドシテ、洋書ヲ掲ゲ往来ス」とある⁷⁾。この「女書生」から、やがて「女壮士」も生れた。

松陰は、「士大夫ノ女子」は、「一箇ノ尼房ノ如キ」学校で、「手習学問女功」に熟練せしむべし、としたが、「柔順」と「果斷」を学ばすには「列女伝」が有効で、まず「君父ノ後宮」が曹世叔の妻（班昭）如き女官を得て、「一国ノ女教ヲ率ユ」べきだ、と主張した⁸⁾。これは、やがて明治政府によって、とりわけ20年以降の「良妻賢母」教育教化によって、基本的には実現に向かう。とくに、皇后のお声がかかりで西村茂樹が編み、全国の女学校に「下賜」された「孝女貞婦烈女賢母」の列伝『婦女鑑』(20年)に、よく象徴される。現に、そこでは、曹世叔の妻が紫式部と並べられる。そうした「女子ノ鑑」の必要を、松陰は説いたのだった。

もっとも、西村編の「鑑」は、「婦徳婦言婦容婦行ノ法」とか「婉婉聽従」「箕帚鍼線」を重んじつつも、新時代にふさわしい「物理経済」と「外国言語文字」の習得を薦めている⁹⁾、範たる古今の女性群に4割の欧米人を含めた¹⁰⁾。だが、女子に危急の際の「果敢」を求めた松陰と同じく、時の文相・森有礼も、「国難に遭遇して奮戦」とか「愛児の戦死の報 母に到る」などの題の絵を校内に掲げよ、と説いた。

が、最初に「女学校」を実現したのは、明治政府ではなかった。維新直後の3年に、七つの藩（佐土原、岩国、福山、松江、豊岡、出石、名古屋）が、作ったのである¹¹⁾。その傾向は二つに分れ、士族の娘を対象にする儒教中心のものと、将来の男女同一教育を志向して開化思想の影を映すものがあった。が、藩そのものと共に、たちまち姿を消す。

代って登場したのが、まず、5年の開拓使仮学校付属の女学校と東京の「共立ノ女学校」（→通称・竹橋女学校→東京女学校→女高師付属高女）だった。前年に渡来した5少女の留学は、北海道開拓のためだったが、開拓使女学校はやがて廃校となり、すぐに「東京女学校」となった後者も、西南の役に伴う経費削減で、10年に廃され、生徒は、東京女子師範（→東京女高師→お茶の水女子大）の英学科に編入された¹²⁾。7年に入学の多賀春子（→鳩山）はこの過渡期を経験したが、女子師範の詰め込み主義には疑問を感じたと言う¹³⁾。19～23年には東京高女と呼ばれ、最初の女流作家と言ってよい田辺龍子や岡本栄子（→木村曙）は、共にその頃の生徒だし、森キミ（→小金井喜美子）・大塚楠緒子・北田尊子（→薄氷^{うすひら}）もほぼ同時期にここで学んだ。

この学校は官立だったが、創立時は「西洋人教師」を雇い、英語を重視したから、廃校時には英学科として編入されたのである。東京女子師範¹⁴⁾も8年の開校時には不人気で「女子師範 さて縁遠い顔ばかり」と揶揄されたが、鹿鳴館時代の18年には制服を洋装とし、洋楽と舞踏を教えさえた。17年の入学で後年に東京女子大の学長となる安井てつは、「官立学校なのに」と憤慨した¹⁵⁾。のちには堅苦しいイメージを伴うこの学校も、19～26年の間は制服も洋装

だったのであり¹⁶⁾、高女に居た岡本栄子も率先して洋服を着て、巧みな舞踏でも目立ったと伝えられる¹⁷⁾。

こうして、七藩のそれ以降は、「女学校」という語は、「洋学紳士」に劣らず、「開化」の象徴となり、和漢の教養を重んじる跡見塾や桃夭女塾のような例を除けば、多くは、「英学」の魅力で惹きつけたのである。となると、6年に切支丹禁制の高札が撤去されて勢いづいた、外人伝道師による「耶蘇」の塾が、女子教育をリードし始める。それらは、日本人の女塾と共に、「女学校」を名乗り、多くは、校名に「英和」または「和英」の語を冠したのである。この「洋学」＝「英学」を教える「西洋人」は、英人ではなく、ほとんどすべて米人だった。開港させたのはペリイだったから当然だし、当時の米国プロテスタントは、各派とも、太平洋を越えた西側＝アジアへの「^{ミッション}伝道」に、熱情を注ぎ始めていたのである。「ミッション・スクール」とは、狭義には、外国人伝道者の学校であり、そのほとんどが、米国の「^{ピューリタン}清教徒」の諸派に支えられ、日本での伝道では、とくに^{エビスコパル}監督派・^{プレスビテリアン}長老派・^{ダッチ・リフォームド}オランダ改革派・^{コングリゲイショナル}組合派（会衆派）が先頭に立った¹⁸⁾。

Ⅲ.

耶蘇系の女塾は、高札撤去以前からあり、横浜でヘブバーン（ヘボン）夫人が始めたものが、もっとも早く、維新の前年である。次いで、それを継いだキダー嬢のもの、カロザーズ夫妻のものが、それぞれ横浜・東京で、3年に生れ、前者は、9年には本国の援助責任者の名を取ってフェリス和英女学校となり、「家庭小説」の先駆者・島田嘉志子（→若松賤子）を一期生として送り出した。東京婦人矯風会の創始者の一人・佐々城豊寿や、その姪で『安曇野』のヒロイン・星良（→相馬黒光）も、一時はここに学び、中島湘烟（←岸田俊子）が漢文を教えたこともある。後者は、山田恒子（→ガントレット）や波多野秋子が学んだ、女子学院の前身の一つとなった。

但し、耶蘇系と言っても、原女学校や、それを吸収して女子学院のもう一つ

の前身となった桜井女学校、同志社女学校、梅花女学校、明治女学校のように、日本人伝道者が創立したのも、少なくない。

いずれにせよ、10年代の女学校界では、基督教系が圧倒的な優位に立った。21年までにその数は、40校近くにも達しており、そのほとんどが、今日の「名門」女子大へと発展した。当時の増加の勢いは第2表を見れば一目瞭然である。それだけに、欧化に対する反動期になると、こうした「外国かぶれ」の学校への風当たりも強くなったし、また、奇妙なことに、信教の自由が保証された第二次大戦後も、男子校・共学校を含めた基督教学校連盟の加盟数100足らずという数は、明治末のそれと変わらず、そのうちの女子校の数は、明治20年のそれからあまりふえていない¹⁹⁾。

だが、耶蘇系の女学校が明治の女子教育に果たした大きな寄与は、誰も否定できまい²⁰⁾。宣教師たちは、周囲の偏見に耐えて、背中を丸めて内股に歩く姿勢をやかましく矯正し、なによりまず、「人格の独立性」と「男女の平等性」に目醒めさせ、耶蘇イエスの教えは、男たちよりも女たちの胸に、より深く入り、永く止まった。明治の小説に、男よりも女の信者の方がしばしば描かれたのも、それゆえだろう。

「ピューリタン」と言えば、きびしい「禁欲主義」が連想され、たしかに宣教師たちの躰けは厳格だった²¹⁾。だが、彼らの精神形成が19世紀の合衆国でなされたことは、その「女性」観に影響しただろう。

明治初期の日本女子教育に寄与した女宣教師たちは、既婚・未婚の別や年齢・宗派の別を含んで多様だが、各人の生活歴は詳らかにしなくても、或る傾向性は仮説的に推測しえよう。まず、圧倒的多数はアメリカ合衆国のピューリタンだったが、1870年前後の来日とすれば、年齢差を考慮しても、19世紀半ばの合衆国と、そこでのキリスト教会および女性の地位という、共通の体験・条件が問題である。

まず、19世紀前半のニュー・イングランドでは、Ch. フィニーに代表される熱烈な「リヴァイバル」運動があったが、それは「社会改良」、とりわけ奴隷制

明治の「生意気娘」たち（上）

第2表 明治前半(21年以前)に創立の女学校

(下線のもの以外は、
すべてキリスト教系)

	<官・公立>	<私立>
明治3年	七藩の女学校	(横浜)キター塾(→フェリス和英女学校) 築地A6番女学校(→原女学校)
明治4年		横浜ミッション・ホーム(→横浜共立女学校)
明治5年	(官立)東京女学校 開拓使(仮学校付属)女学校 (京都府立)新英学校(→府立第一高女)	<u>上田女学校</u>
明治6年		築地B6番女学校(→新栄女学校→女子学院)
明治7年		女子小学校(→海岸女学校→青山女学院) グラハム女学校(→女子学院)、駿河台女学校
明治8年	石川(県立)女子師範 栃木模範女学校(→栃木女学校) 東京女子師範(→東京女高師)	跡見塾(→跡見女学校) 神戸ホーム(→神戸女学院) 照暗女学校(→平安女学院) (仙台)尚綱女学校
明治9年	長崎(県立)女学校	原女学校、桜井女学校(→女子学院) 同志社女学校
明治10年	学習院女子部、静岡(県立)女学校 山梨(県立)女学校	立教女学校、海岸女学校
明治11年		梅花女学校
明治12年	岐阜(県立)女学校 愛知(〃)師範付属女子部	(下関)光塩女学校(→梅光女学院) 永生女学校(→プール女学院) 仏英和女学校(→白百合学園)
明治13年	徳島(県立)女学校	ブリテン女学校(→成美学園)
明治14年		神戸女子伝道学校(→聖和女学院) 桃夭女塾(→華族女学校)
明治15年	東京女子師範付属高女(→東京高女) 群馬(県立)女学校	(函館)道愛女学校
明治16年		<u>蒸紅学舎</u>
明治17年		東洋英和女学校、北陸女学校
明治18年	華族女学校(宮内省)	大阪一致女学校 (→ウィルミナ女学校→大阪女学院)
明治19年		明治女学校、福岡女学院 <u>共立女子職業学校</u> (→共立女子大)、宮城女学校 広島女学院、松山女学校、宮崎女学校 弘前女学校(→聖愛女学校)、山陽英和女学校 円山女学校(→ノートルダム清心女子大)
明治20年		<u>親和女学校</u> 、 <u>白蓮女学校</u> (→徳山女学校) 静岡英和女学校(→静陵女学校) 熊本女学校、新潟英和女学校、捜真女学校 普通土女学校、香蘭女学校、 <u>成立学舎女子部</u>

※金森トシエ『女の教育100年』(昭和52年、三省堂)の末尾の年表をベースとして、註(12)・(18)・(19)の文献を参照して補正したが、廃校・合併・改称について、不詳の部分がある。

廃止、飲酒・売春・姦淫への糾弾に情熱を注いだ。この運動に参加した女性の一部からは、女性の権利拡大への運動が推進され始めたのである。大西洋の西と東で始まった奴隷廃止運動と女性解放運動は、「憲法修正13条」問題をめぐって対立に到り、ために後者の「参政権」要求は20世紀に至るまで全面実現はしなかったが、共に相関したのは当然だった。この時期に、女子のための教育機関が少しずつ生まれ始め、高等教育を受ける女性も目立ち始めたのである。

たとえば、最初の女学校は、1822年にウィラードの建てたトロイ女学校で、のちに最初の女子大学となる M. ライオンのマウント・ホリヨーク女学校は37年に生れたが、48年のセネカ・フォールズでの「婦人の権利」宣言をきっかけに、女権運動の組織化が進むのは50年代を通してであった。あの「ブルーマー」女史は、この流れの中で生れたし、初の女性医学博士も生れた。60年代に入ると、南北戦争と奴隷問題優先によって分裂・停滞が起きるが、その間にも、YWCA（66年）が生れ、明治維新の68年には、婦人労働協会が生れ、婦人参政権を与える憲法修正案が連邦議会に提出された²⁹⁾。

もっとも、女権運動にも過激・穏健の差はあったし、参政権自体についても対立があった。また、キリスト教会や牧師の間では、男尊女卑の観念が強かったし、女性クリスチャンもふくめて、当時のアメリカは、実は、「女らしさ」が強く重んじられ、「レディ」らしくなるための礼儀作法の手引書は、何十種類もあった。だが、それだけに、少数の尖鋭な女権意識も強まったのである。一般には、女性が就職することはきわめて例外的だったが、「宣教師」になる、あるいは、そのために神学校なり女子校または先進的な共学校に進学すること自体、例外的な進歩的選択だったろう。

この意気盛んな女宣教師の登場なしには、リヴァイバルに発して高まった「海外伝道」熱も、ありえなかったろう。組合派を先駆に、各宗派が海外伝道事務局ボード・オブ・ミッションを作るが、明治日本のミッション・スクールは、それらを通じて示された各地の米国婦人たちの協力によってしか、支援されなかった。そして、たとえば、活水女学校に高度のカリキュラムを持ち込んだラッセルのよう

な最高レベルの女子教育を受けた宣教師も、海を越えてやって来たのである²³⁾。

当時の女権運動は、必ずしも「参政権」獲得のみを目指したわけではない。それは一種の「ピューリタンの」論理の強調をも伴ったのであり、とくに、「男性への従属」を否定するところから、性的モラル・禁酒の重要性を強調した。「矯風会」運動の源はそこにあった。

してみれば、日本に来た宣教師たちが、教会と学校でそれを力説したことは想像できるし、実際、日本の「婦人矯風会」運動（19年～）は、米国婦人の影響のもとに生れたのであり、『女学雑誌』も繰返してその記事を掲載した。だが、日本では新たな固有の問題が加わった。それは、「畜妾」と「娼妓」の制度への攻撃——「一夫一婦」と救世軍に継がれた「廢娼」の運動である²⁴⁾。

だが、いずれにせよ、イギリス経由のスペンサー、ミルらの人権論に基く女権論と、合衆国から渡ってきた若々しい「アメリカン・デモクラシー」が、明治の日本列島で出会ったことは、注目されてよからう。病院、孤児院、保育所、幼稚園、救癩施設なども、「地の塩」とする宣教師たちと基督教系女学校の卒業生が、まず礎を築いた。貧しき者・虐げられし者への愛を説く「耶蘇」の教えは、乙女たちの心を激しく揺さぶったに違いない。

但し、人格の独立・平等という観念は、基督教の父性原理や開拓時代からの男尊女卑の慣習との矛盾を含むし、宣教師は、「布教」にきわめて慎重で、世間に対して妥協的となり、政府や父兄の意向に沿う日本的「婦徳」を重んじる耶蘇系の女学校も多かった。だが、それでも、「洋風」のマナーやモラルを彼らが捨てるわけにもゆかず、それがまた、「文明」派の父兄と娘たちを惹きつけもした。

そこで、20年前後から、鹿鳴館をめぐる上流階級の「醜聞」や不平等条約への不満も重なって、「西洋かぶれ」の女学校に対する反撥が、論壇・文芸・世論に現われ始める。日本人基督者の間でさえ、外人宣教師たちと距離を保つナショナリストは多く、外人宣教師の手を借りない日本人だけの耶蘇系女学校も

生れた。そのもっとも徹底した例が、木村熊二・鏡子夫妻の明治女学校（18～41年）や沢山保羅^{ボロ}の梅花女学校（11年～）だった。

IV.

明治女学校の名を喧伝させた功績は、もちろん巖本善治に帰するが²⁵⁾、彼を招いたのは、旧出石藩の先輩にして、渡米後は宣教の志を抱いて帰国した牧師・木村熊二であり、実質的に初代の主宰者となったのは、夫人・鏡子であり、巖本が深く追慕したのは、この夫人だった。巖本は熊二の教会で受洗したのだった。島崎春樹（→藤村）もここで受洗し、熊二が創設した小諸義塾に招かれ、のちに明治女学校に推薦された。

このユニークな女学校が有名となったのは、巖本が近藤亡きあとに引き継いだ『女学雑誌』のゆえだが、また、文学史に名を残す作家たちの青春が、そこで過ごされたからでもあった。そこに集まった若き教師たちの中には、星野天知以下、やがて『文学界』を創刊する面々が加わった。島崎藤村が北村透谷に先立って勤めたのは、明治25年のたった4ヶ月だが、その回顧は、『春』（41年）と『桜の実の熟す頃』（大正6年）に見られるし、それらに一種の兄貴分として登場する天知の『黙歩七十年』（昭和13年）は、晩年に顧みた追想記である。

この若々しい多士済々の教師陣に多くの知的刺戟を受けた学生には、清水紫琴（豊子）、相馬黒光（←星良）、大塚楠緒子、羽仁もと子、野上弥生子があった。もっとも、彼女たちの在籍は、最盛期のあとだが、初期に一時在籍した者には、田辺龍子があり、彼女は、ここに憧れてフェリスから移った黒光とは逆に、跡見塾→桜井女学校と移ったあとここに入り、すぐ東京高女に転じた。女高師付属高等女学校になってから入った平塚明も、明治女学校の友人を羨ましく思った。これらの元学生の追想は、黒光の『黙移』が代表的だが、創作の形をとったものとして、晩年の弥生子の『森』があり、黒光を主人公にした時代史を小説化した臼井吉見の『安曇野』は、よく知られている。

こうした多彩な群像を輩出した女学校は稀有だが、それは、ここにあった

リベラル
自由な雰囲気にも依ったろう²⁶⁾。寄宿舎を中心にした家族主義的な小規模だっただけでなく、学生代表が教職員の会議に参加したり、成績による進級・落第はなく、教員と生徒一人一人との話し合いが大切にされた。特に礼拝の時間は設けられないが、月曜日には聖書を中心とした厳本の話があり、クリスマスが学生たちのいちばん楽しい催しだった様子は、『森』に描かれている。キリスト教主義の学校ではあったが、他校のような「風紀」に対する過度の干渉はなく、男女交際に対する格別な干渉はなかった。実際、ここでは若い男性教員と生徒の間に多くの恋が芽生え、それは、とりわけ20年代に抬頭する浪漫派文芸を育む酵母ともなり、結果として明治文学に寄与したのである。

厳本は、属した教会の縁でフェリス和英女学校に出入りして、その第一期生たる島田嘉志子と22年に結婚したが、彼女は、女学校ではおそらく初の文学研究会『時習会』を校内に組織するかたわら、その母校でのちに教える中島湘烟と共に、19年から『女学雑誌』の常連寄稿者となっていた。彼女の名を高からしめた翻訳『小公子』は、その3年後にやはり同誌に現われたのだが、若松賤子という筆名は、滅亡した会津若松藩の出身だった彼女が、ミス・キダーらの愛護のもとで「イエスの賤しずめが女」となった——ということから来ている。敬虔で貞淑なクリスチャン・嘉志子は、ピューリタン風の禁欲主義の外に出ることなく、「家庭小説」の域に止まったが、厳本の「愛」の精神は、フェリスに代表されるキリスト教主義の女学校一般よりも、はるかにのびやかで、自我と個性の実現を重んじる校風を育てた。

また、この学校は、「武芸」を重んじる点でも異色だった。厳本を助けた星野が、武道と禅に通じ、精神修養を強調したからである。

V.

「女学校」とは、要するに、家庭の外で少女たちが学ぶ場としての、「女」の「学校」だった。ところが、10年代の半ばを越えると、或る特別なニュアンスで「女学」を主張する者が、現われ、それをめぐる論争も生じる。

この語が登場したのは、2年前に帰った津田梅子よりも共に2才年長の両青年——新渡戸稲造が米国へ、森林太郎（鷗外）が欧州へと出帆した17年に『女学新誌』が、次の年、坪内雄蔵が『小説神髓』と『当世書生氣質』を出して一躍脚光を浴びた18年には『女学雑誌』（～37年）が、相次いで公刊された時期からだった。この二誌の創刊者は近藤賢三だが、彼を助け、その早世後をよく継ぎ、女学校史に不朽の名を残したのは巖本善治である。これは総合雑誌の先蹤であり、19年創刊の『女学叢誌』や20年からの『日本之女学』はその亞流にすぎず、近藤・巖本の高い志と無縁だし、『国民之友』や『日本人』は、『女学雑誌』に遅れること、それぞれ2年、3年である。文芸誌『女学世界』（34年）はさらに約10年余遅い²⁷⁾。驚くべきは、『女学雑誌』が19年間・526号にも及んだことである。

近藤と巖本の縁は、津田仙（梅子の父）の農学社で生れた。津田は、農学と教育と耶蘇教会に寄与した点で、内村鑑三や新渡戸に先駆けたが、耶蘇信徒となった巖本や、やはり農学を学び受洗して明治女学校で教えた星野天知をも、考え合わせると、植物を育てる農業・人間を育てる教育・愛を説くキリスト教の、一種の三位一体も興味深い。

『女学新誌』の趣旨は、「婦道を乱るの嘆き」に共感して「我が日本婦人の真面目を一新」するにあり、平明を旨として傍訓を附す——といった程度だったが、『女学雑誌』になると、「男子の下に圧せられた」女子の「並立」を理想とし、「欧米の女権」と「吾国従来の女徳」を合する模範を作り、「日本の婦人を教導」して「其の真正の地位」を得しめん、と謳う。そして、4号は社説「女学校の必要」を掲げ、2年後の20年には『通信女学』と題して通信講義録を発行し、23年には、京浜の15校が協力する文芸投稿誌『女学生』（～26年、『文学界』創刊に伴ない廃刊）さえ発行するに至った。

巖本の「女学」は反復・一貫して「女権」・「男女交際」・「一夫一婦」・「女子職業」の必要を説くものだった。

だが、独特の「女学」論が正面切って主張されるのは、21年の111号（5/26）

である。それは、この語に対する田口卯吉の批判、と言うよりはむしろ言いがかり・揚げ足取りが、きっかけだった。田口は、巖本が敬慕した明治女学校の創設者・木村鏡子の実弟である。

彼は、女学校は「女の学校」であり「女学の校」にあらずとして、女学 (science of woman) と女子教育 (education of woman) を巖本らは混同している、と批判する²⁸⁾。

これに対して巖本は、「女学」は、単なる女子の学問・教育ではなく、「凡そ女性に関係する凡百の道理を研窮」する「婦女子に関する一科の学問」であり、その目的は、抑圧された女性を「正当な地位」に立たしめることにあり、女学研究の士＝「女学士」は、女性の友・兄弟、代言人・弁護人にして案内者ともなり、権力と闘って処罰されることも覚悟せねばならない²⁹⁾。これは今日のフェミニストの「女性学」の先駆である。だが、もちろん、世間の考えた「女学」は単に「女の勉強」にすぎなかった。

女学校で「新知識」を学ぶ娘たちには、没落士族や庶民層の功利的判断と、一種の社会的使命感も共存しえたろうが、なによりまず、女でさえ時代の先端に立てるのだという喜びがあり、その前提たる「自由」と「権利」の観念に、勇気づけられたのである。多くの娘は、漠然と「良縁」を夢見ただろう。だが、自活の道を切実に求める家庭事情や、新社会に貢献せねばという憂国の至情を抱えた少女たちも、居たに違いない。また、「民権」があれば「女権」もあるはず、と思いつめる娘たちも現われる。

こうした女学校熱を背景に、政府は、12年の教育令で男女別学・女教師採用を定め、15年、東京女子師範に「高等女学校」を初めて設け、18年に「良妻賢母」主義を唱え、20年に高等女学校のための「教導方要項」を決め、指導と統制への下地づくりに着手する。また、学習院女子部を独立させ、宮内省直轄の華族女学校（18年）を設立し、基督教に反撥したが立ち遅れた仏教界も、ようやく女子教育に乗り出して、親和女学校、白蓮女学校（20年）（→徳山女学校）、相愛女学校（21年）が生れた。他方、明治初期の「女紅場」から実業教育へと

脱皮すべく女子職業学校（→共立女子大）が19年に生れ、のちの実践女学校（→実践女子大）にモデルを供した。

VI.

こうして、20年前後に、女の園の花々は咲き揃って、最初の満開期を迎えることとなった。「父兄は、女大学を架上塵深き間に埋め置いて、先づ其嬢を文明の学校に送らんと」して、娘は「庭訓今川を知らず」して「只だ専ら英文仏語を我国の文章言語の如く使用せんと学ぶ」と、20年の『女学雑誌』（76号）は記している。

実は、「女学生」を描く最初の小説群が現われたのも、最初の「閨秀」作家たちが登場するのも、この時期（19～22年）なのである。明治の代表的な文芸雑誌が簇生するのは、これに引き続く20年代であり、その中では後発の『文芸倶楽部』が「閨秀作家特集」を組むのは、28、30年の二度に亘るが、そこに妍を競ったのも、20年前後に青春を迎えた世代だった^{30）}。

だが、最初に女学生（あがり）を登場させたのは、男性作家であり、そのヒロインたちは、楚々たる温室の花などではなく、「烈女」または「女侠」タイプの「女丈夫」であり、胆力と勇氣ある「佳人」なのだった。それは10年代後半の「政治小説」流行の副産物なのである。

今日なお、10年代後半に流行した「政治小説」の代表作とされる末広鉄腸の連作『雪中梅』（19年）・『花間鶯』（20年）のヒロイン・お春は、没落士族の父を亡くして洋学塾に通うが、演説会にも行き、若き民権政治家と結ばれる。彼女は、苦境に耐え、誘惑を退け、みずから結婚を申し込み、脅迫する壯士たちに毅然と対応し、逆に敬服させてしまう。いかにも民権運動出身の記者・政治家たる鉄腸らしい、典型的な「佳人才子小説」である。「佳人」は当時の流行語の一つで、前年の『佳人之奇遇』（東海散士＝柴四朗）が、革命や民族独立に命を賭ける碧眼紅毛の女性たちをそう呼んだように、美貌と知性を兼備するのみならず、義に起ち勇を振るう俠氣と胆力をも、必須としたのである^{31）}。だから

こそ、お春を「其頃の新時代的女性の最高典型」だと、本間久雄は評したのだった³²⁾。武家の娘が自由思想にめざめ、民権闘士を支える——10年代を生きた人びとにとって、それはリアリティを持った。

20・21年の2年間に、題名に「佳人」の語を含む政治小説は、10編にも及んでいる³³⁾。だから「女学生」と言っても、のちの「星董派」とは無縁なのである。

自由党出身の鉄腸に対して、改進黨の須藤南翠も、『雪中梅』に踵を接した連載・『^二新粧之佳人』で、政治に深く関わる「女学士」たちを登場させた。中心は保守党屈指の青山伯爵の夫人・政江で、婦人の地位を高めるための「帝国婦女協会」の会長であり、米国帰りの社交界の華である。華族女学校と名声を競う翠紅学校の校長・和歌子は、「温雅なる女博士」として声望高く、本務のほかに自宅に30人の女子を養い、「純良の母」を育てようとしている。彼女は宮中に仕えていたが、夫を亡くし家塾で幼女を教えていたのを、保守党の領袖で大宰相の前野伯爵の恩顧で、校長になったのだった。二人の名流婦人は、改進黨と争う与党・保守党のために、盛んに選挙運動をする。が、政江には若い恋人が居り、新聞には、前野に似た紳士が妊娠した女官と馬車に乗る漫画が出る。

これに対して、政江の妹・^{はつき}莠は、これまた米国帰りの有名な女博士で、「婦人読書会」の副会長を務め、宮中で侍講もする才媛だが、姉とは「氷炭容るるに易からざる」間柄で、「婦人の道德の彼方へ去りし」姉を、「洗れたる迷いの淵より救い出さんと」望んでいる。彼女は、「学問を良人だと假定めて」いるが、「二夫に目見えず」論者で、寡婦も再婚の権利があるとする和歌子をも批判する。ピューリタンではないが、潔癖な道德主義者なのである。

だが、この作のヒロインは、彼女たちではなく、若き改進黨員を助け、孝心篤く家事万端に長じ、独学してスペンサーの教育論も読む、学歴なき女侠・お千代である。恋人はついに海軍大臣を兼ねる改進黨首領となり、二人は耶蘇教の立教会堂で盛大な結婚式を挙げる。莠は彼女に協力し、政江と和歌子らの保守党は打ちのめされる。

斬新な細部の着想を多く含むこの作は、大いに人気を博したが、いかにも通

俗的な勧善懲悪調の政治小説である点で、鉄腸の作と同巧ながら、大山捨松や下田歌子の醜聞を連想させて上流婦人を諷刺し、また、「女学」問題に筆を多く費やしたあたりに、新奇さがあった。但し、作者は、鉄腸同様、「婦徳」にこだわるのである。

お春やお千代と入れ違いに現われた女俠は、「女子参政権」の実現を国会に要求する政党リーダーである。『^{女子参政}蜃中楼』（20年、『東京絵入新聞』、広津柳浪）の敏子は、女学生ではないが、洋装し、汽車の中でも洋書を読む、明らかに女学生あがりとも見え、有力者の令嬢でもあり、優雅かつ悠然としている。彼女は、参政権運動のため赴いた大坂で、従妹を救ったり、犯罪に捲き込まれたあと、姿を消す。悪人をピストルで成敗したのはこの美人闘士だ、という噂まで流れる。作者は、単に風俗小説の味つけに当時の女権運動を用いただけで、前口上で述べるように参政権などはどちらでもよく、作中でそれを失敗させもするのだが、これを政治小説に数える者があるのは、政界を背景に使ったからだろう。

お春と敏子は、片や和服・民権・勝利、片や洋服・女権・挫折と対照的ながら、共に気品と知性に富む女俠タイプである。そこからたちまち、岸田俊子（→中島湘烟）や景山英子（→福田）を連想することもできよう。岸田を美人と伝える者はないが、少女にして宮中で皇后に漢学を講じながら、一転して民権・女権の闘士となり、20才にして名演説家と謳われ、民権の同志と受洗・結婚後も、女権のために論陣を張り、新栄女学校やフェリス女学校で国・漢を教え、初代衆院議長夫人となっても筆を捨てなかった³⁴⁾。逮捕された彼女の釈放を求め、警察に乗り込んだ「門人」たる8才の少女も居たが、彼女の演説に感動した18才の景山英子は、民権仲間と朝鮮介入を企て、爆薬をひそかに持ち歩いたあげく、密航直前に捕らわれた（大阪事件）が、獄中に居る間に、『自由之犠牲女権之拡張・景山英子之伝』（20年、独善狂夫）という評伝まで公刊された³⁵⁾。俊子、英子の逮捕は、それぞれ16年、18年であり、英子伝が出たのは、『花間鶯』が完結し『蜃中楼』が連載されている最中だった。お春と敏子は、俊子と英子の同時代人なのである。

俊子と英子は、それぞれ、維新の年に5才と4才だったが、前者は京都府女子師範学校に、後者はミッション系の新栄女学校に、わずかに在籍しただけで、女学生生活はほとんど体験していない。同世代でやはり民権運動に加わった富井とら（→於菟）や清水豊子（→紫琴→古在豊子）の場合、前者は龍野中学（共学）を卒業して英子の友となったが、のち植村正久に師事し、明治女学校で教え、後者は同志の子を産んで運動を退いたのち、明治女学校を出て、そこで教えもした³⁶⁾。この世代には、内・外の政治に強い関心を持つ女学生も多かったはずである。明治16～17年頃、東京女子師範の一期生として教師をしていた佐方鎮子は、同期の友・青山千世（山川菊栄の母）に宛てた手紙の中で、清仏戦争や英国の印度支配に対する義憤を吐露している³⁷⁾。そういう時代だったのである。

やはり20年、柳浪の作に先立ち、『読売新聞』に連載された『薺の椿』（饗庭篁村＝竹の屋主人）にも、「女権拡張」に賛成する「束髪」派の女学生・お梅が登場する。彼女は、ヒロイン・お玉が奉公する元士族の有力者の令嬢だが、新聞の投書欄に、学問する束髪（女学生）は「生意気」だとあるのに怒って、「男女同等」と知るはずの洋行帰りの紳士も、本心は旧習に異ならず、女を「男のおもちゃ」と思っている連中が多い、とお玉にこぼす。そして、仕えるお玉に、「主従」ではなく米^{あめりか}国みたいに姉妹同様になろう、と言い、一緒に勉強をする。だが、お春や敏子のように政治とは無縁の平凡な日常で、結婚するなら「学問の深い見識の高い人」と考えており、兄の友人の官員・吉川に惹かれている。ところが、お玉は彼にもっと憧れており、しかも自分を見染めたのは、頼もしくみえない兄の別の友人で、やはり官員の住田である。兄よりも「雄々しい」と父の眼に映る彼女も、大いに悩むが、吉川はお玉に惹かれているし、住田とは、女権をめぐる論争してから認め合い、「西洋の法式」に倣い、「耶蘇教師」の前で結婚を誓い、夫の海外出張について行く。

没落士族の父を失ったお玉は、お梅より内気だが学問では令嬢に勝り、或る男の奸策で窮地に立つが、吉川とめでたく結ばれる。いかにも通俗的な世話

物の大団円である。江戸趣味に通じた粹人の作者が女権派の女学生を肯定的に描いたのは注目されようが、親友の逍遙（＝春のやおぼろ）からずいぶん西洋の知識を得たという。たちまち大家となったこの二人は、それぞれ2年後、1年後に、若い女流作家たち——木村曙と三宅花圃を世に送り出すことになる。

VII.

篁村のこの作は、政治小説とは違って、アクの強い敵役は出てくるものの、市井の父・娘と下女の玉の輿を描いた、やや旧風の物語だが、性格と心理を深く彫り上げてない。そこへ、うだつのあがらない男の内面を掘り下げる二葉亭が現われる。彼は24才の青年だった。

前年に初めて訪ねた逍遙の後押しで『浮雲』（20年）が出たのは、篁村の作に6ヶ月、柳浪の作に2ヶ月遅れてだった。二葉亭のこの作も、平凡な市民生活の日常を描き、やはり「官員」と女学生が登場するが、もちろん作者らしく、どの人物を見る眼にも皮肉の色が漂う。家つき娘のお勢は、士族の娘でもなく、女権論者でも才媛でもない。それでも、通っていた女塾がいいかげんで、すぐつぶれたので、英学校に入り直し、創刊して間もないが大人気の『女学雑誌』を読み、話に英語を挿んだりもする。下町育ちの彼女には、蓮っ葉なところがあり、「ねおい根生のおいそれもの軽躁者」で、「西洋主義」のわからぬ母親を「下等の動物」と蔑む始末である。

父はなく、同居する従兄の文三とは、ゆくゆくは結婚する相手として、互いに暗黙の了解はしてるが、幕府直参の没落士族の伴・文三は、苦学して官員になったものの、「性質がうちば内端」で有能でなく、突然、免職となった。そこへ軽薄な出世主義者・本田が出入りし始めると、お勢は彼と軽口を言い合うのが楽しくなる。ときにはわざと媚態を本田に示して、文三の反応をこっそりうかがうが、彼は愛想なくて、何を考えているのか、はっきりしない。が、この作は、もっぱら文三の内面を中心に見ていて、女心のわからぬ彼には、お勢の本心がかみかず、苛立つばかりである。彼女は本田に誘われると浮き浮きするようだ

が、やがて本田が上司の令嬢と結婚するつもりとわかって、お勢はなにやら悩ましげになり、しばらくすると今度は、しおらしく編み物を習い出し、「人品を落とすほどに粧って」出掛ける。英語よりはおもしろいらしい。それにもともと、「男女交際、婦人嬌風」など当世風の話題にも、退屈しか感じないタイプなのである。

この作については、すでに多くが語られすぎてきたが、概して文三に同情的である。だが、こういう男には、お勢ならずとも、魅力を感じる女が居そうにない。また、たしかに彼女が広義の女学生の端くれで、しかもその軽薄な一部にすぎぬにせよ、当時の平均的な女学生は結婚を夢見ており、よほど勉強熱心で女教師にでもならぬかぎり、「自立」の道などはなかった。お勢にしても、文三が格別の能力はなくても、はっきりと愛してでもくれたら、態度を変えたかもしれないし、女から積極的になるなど、お春や敏子ほどの勇気でもなければ、お玉はもちろん、お梅にだって、できなかつたろう。そういう時代だった。

篁村と二葉亭の作は、話の筋としては平凡だし、お春・お梅・お勢は、たとえ束髪にせよ、和服の似合う雰囲気がある。けれども、この娘たちは、ともかく「新時代」の空気を吸おうとしている。もっとも、お勢には積極的な意気込みはなく、おそらくそれは、「女学校熱」と共に功利的な動機で通うだけの娘たちもふえる現実を、写していたのだらう。が、この女学校熱のさなかに、才媛が現実の壁にぶつかって不幸な家庭生活を嘆くという、佳人才子小説の常套に冷水を浴びせる作品が、18～9年にかけて連載されていた。

「近代小説」の産みの親・坪内逍遙は、また、「女学生あがり」を小説に描いた先駆者の一人である。というのも、『小説神髓』と『当世書世気質』によって登場した同じ年の暮れから、『妹と背かがみ』の脇役ながら、「女子師範」を卒業したお雪を、登場させたからである。地位と富ある官員の娘たる彼女は「学芸拔群」で「歩めば金蓮足下に生じ。楚々見る人の心を動かす」美女だが、「惜むらくは愛嬌乏しく。ホ、とうち笑ふことのいと稀」な性格である。士族の法学士と結婚したが、「女子は社会の一要素」と考えて姑からも庇ってくれる夫

を、たしなめる賢妻で、しかも、寝る時は三つ指をついたり、早く、と床に誘う夫に「仕立物を仕舞ひましてから」などと言う。だが、何年かするとやつれてしまい、「生中なまなかに学問をした」のが「苦しみの種」と、胸の裡をのぞかせる。

女学と現実の矛盾への同情はあるが、芸妓を妻とした作者は、もともと、女学校に懐疑的だったと見え、世代対立に触れつつ、子供たちが「新主義に傾き。中にも生意気なる先走まきほしりの、男女同権なんによとか。親子の義務とか。間々はま嚙違への議論さへ唱へて。」と批判する。

彼は、3年後の22年に小説の筆を絶つ直前にも、『細君』のヒロインを、結婚生活に泣く女子師範卒に仕立てた。彼女は、免職で零落の元官員の娘で、「洋行済、日の出の官吏、評判よき著述家」の夫が世に名を知られるにつれ、やつれ始め、新入りの下女は、「意地わるさうな、不気味な、陰気な、勢ひのない、御病身の奥様」と思って、同情する。来客は多く、西洋料理で豪勢にもてなすが、夫は茶屋女に手切れ金を払ったかと思えば、佛蘭西から追いかけてきた女を妾とし、借金はふえるばかりで、女学生時代から「負惜みの強いのと愛嬌の乏しいので人に知られ」た彼女は、家政が苦手で人使いも知らず、目先がきかぬのに世話焼き、などと古手の女中に陰口を叩かれる。

父の後妻たる継母から無心された彼女は、自分の着物の質入れを、こっそり下女に頼むが、その金が引ったくりで盗まれる。それが「財産は皆夫の物」と言う夫に知れ、「生意気に少し計り権利だとか財産だとか聞きかちって」と罵られ、泣き伏したあと詫びるが、離縁されて、夫は佛蘭西女と再婚する。「格別気の毒なるは鬚なき身の上なり……細君はいつまでも頭の上る時はなし……つまらぬ者は女なり」と、作者は記す。

だが、巖本善治は、著者の作中第一と褒めつつも、「当今文明流の細君もつとの尤も発達したる苦痛」が写されず、あるのはただ「尋常婦人」の怨み・嘆きにすぎぬと評した。彼は「立派な女学生」が嫁となった「新細君」こそは「当今尤も歎き多き婦人」であり、これは十字架にかかる先覚者なのだ、と言うのである³⁸⁾。

他方、『新粧之佳人』で人気を得て、篁村と共に「兩大関」として若き露伴が仰ぎみた南翠も、政治小説から転じ、娘教育をめぐる親たちの新・旧対立を扱い、洋学ばかりと女権思想に水を差した。

20年に『雛黄鸝』と改題・刊行された『^{うぐいす}庭訓籠飼の黄鸝』（19年）は、「西洋かぶれ」の奔放な娘たちと、逆境に育つ内気な娘たちを対比し、時勢を諷する。少女たちが遊ぶ双六は、春酒屋臘作の「淑女鏡」なるもので、「無心の女兒」が「貞良」・「修学」などに励めば、めでたく「夫定め」や「皆老の契り」に達するが、横道にそれると芸者・娼妓になりかねない。これが、娘たちの行く末を暗示する。海軍武官の妻となり、鹿鳴館・慈善会・音楽会、果ては宮中にも参内できる名流婦人に昇りつめるのは、貧苦のなかで旗本あがりの病父に尽くす孝女・お梅である。頑固・旧弊の漢方医の父の許で、茶道や小笠原礼式を仕込まれたお香は、陋巷に埋れて縁遠かったが、富豪の娘で役者好きの妻を離縁したお梅の義弟に縁づく。

逆に、成り上がり高級官僚の娘は、親の薦める縁談を拒み、家を出て恋人の許に走るが、芸者と親しむ夫に怒り、一時は実家に帰ったりする。その妹・お鳥羽は、「女子は男子の上に立つべき」と考え、親との別居も財産分与も当然、と公言する「急激の自由家」で、洋楽も外国語もできる。彼女はお梅の弟と結婚するが、夫の長期出張中に、ギリシャ語の勉強を通じて耶蘇信者の英国人博士と知り合い、その誘惑に負ける。

対極に在るお梅は、子どもたちに編物を教え、自ら縫った服で学校に通うが、「高等女学校」ではない。経済学や育児法を学ぶため、歴史は子育てに必要と考えて兄に、和・漢は父にそれぞれ教えてもらう。結婚後の彼女は、馬丁・車夫への心遣いを忘れず、やさしい夫に感謝し随順している。

お梅は、洋風を部分的には肯定するが、欧化主義と「女権拡張」への作者の批判は、地の文・会話・独白に、生のままに頻出し、あまりに観念的・図式的なこの失敗作は、「死せる開花梅暦」と評された³⁹⁾。ただ、女子教育をめぐる当時の新・旧対立は、ここに映されてはいるのである。

VIII.

耶蘇系の女学校の急増は、南翠の作にも触れられるが、信者の女学生を描く小説も現われた。『女学雑誌』に連載された月の舎しのぶ（厳本善治）の『薔薇の香』（20年）では、洋風の豪邸に住む令嬢のヒロインは、敬虔な信者で、異性愛を「同胞愛」へと純化させたまま、病んで夭逝してしまう。が、悲劇ではない。教会の葬礼は、牧師の神への感謝で終る。神の御心にかなった清純なお光の「生」と「霊」が、天国で「永生」するからである。それもそのはず、作者は耶蘇系の女学校の校長なのだった。お光は豪邸に住み、「東京女学」に通うが、万事に派手な学友・お香とは対照的に、内気でつつましく、男友達の哲の眼には、「心に於ては哲学者、情に於ては優渥なる夫人」と映る。対してお香は、鹿鳴館での舞踏と乗馬に熱心な「着物の美術館」であり、「お世辞の製造所」だが、お光の親友である。お光は哲を敬愛し、病いの床のうわごとでその名を呼ぶほどで、一度は婚約を承諾する。だが、自分を相手と「并ぶべきものでない」と思い直し、哲へのお香の思いにも気付いて、人を不幸にする交際は「愛の為に悪む」と考え、哲との間柄を「朋友」・「兄弟」のそれとして保つと心に決め、婚約を破棄し、哲も納得し、やがて天国に召される彼女のたましいを祝福する。実は、厳本の婚約者・嘉志子も肺を侵されており、この翌年には血を吐いた。次の年にあえて結婚したが、7年後に彼女は世を去った。

それにしても、これまた南翠の「黄鸝」に劣らず、あまりにも観念的なところがある。『女学雑誌』の頁を多く文芸に割き、「女性と文学」の深い関わりを何度も説いた厳本にしては、拙なきにすぎよう。だが、彼の文学観は、内村鑑三のに似て、理念を説く手段でしかなかった。一方で彼は、洋書は読めるが日本的教養を欠く女学校教育を、地の文の中で批判し、齒の浮くような英語まじりの女学生言葉を諷刺もしているが、他方で、教会と讃美歌に彩られた基督教の愛の説を、生硬な筆でそのまま示す。だが、受洗した作家は多くても、明らかに基督教的な小説が皆無に近い明治小説界にあって、文芸史家が完全に黙殺

したこの異色作は、貴重な例外かもしれない。すでに耶蘇系の女学校は多く存在したのに、この頃はまだ、藤村や独歩の教会描写さえ、現われておらず、のちに作家となった受洗者は、生涯を信者らしく送った賤子（10年）と芦花（18年）ぐらいで、泡鳴・透谷・藤村は、この年に受洗したばかりだった。

ところが、翌々年には、信者のヒロインが厳本を激怒させる『くされたまご』（22年、嵯峨の屋お室）が『都の花』第9号に現われた。そのヒロインもお光と同じく信者であり、しかも耶蘇教の学校で教える女教師でありながら、その学校の創立者の息子と共に酒を飲み、少年を誘惑し、身ごもりさえするのである。これまた、この時代では破天荒な作であった。「風教雑誌」を読み、「人間は汚れた罪ある心を以て、世に生れた」から「神の恵み」でなければ幸せにならない、と言うところまでは、文子も普通の信者である。だが、「新主義」、「ざっくばらん主義」を称し、禁酒などは「儀式上」のもので、「道理を知ってる者」には無用であり、酒を飲むと「気が清々とし」て「罪も報いも」忘れ、「眞個ほんとうに清浄しじやう潔白」になる、と公言して憚らない。が、男友達は離れ、父なき子を宿して、周囲から白眼視され、「途方に暮れ」て終る。

だが、この作者もまた、真摯な求道精神を持ち続けた理想主義者であり、だからこそ親友の二葉亭に評価されるほどの作を書かずに終わったのだが、その潔癖のあまり、「墮落」せる信者を批判したわけである。彼の人柄を知った厳本は鋒先を緩めたが、表現の露骨と登場人物の汚らわしさが、許せなかった⁴⁰。嵯峨の屋とは言えば、一時は仏教に熱中してたが、この作の翌年には基督教に入り、やがてユニテリアンとなり、のちには見神を二度も体験した。当時第一線の批評家・石橋忍月は、厳本とは異なって、この作をむしろ「文字頗る壯快沈痛」と評した。が、逆に、基督教徒とりわけ「ピューリタン」の禁欲に偽善的な非寛容を嗅ぎつける読者には、文子の無頼に純粹さゆえの逆説を見て、忍月とは逆の痛快さを感じるだろう。

いずれにせよ、逍遙・四迷・嵯峨の屋・厳本らの作には、佳人才子小説風の単純さと大団円はもはやなく、言わば「近代人」の内面の複雑な翳りが現われ

始めている。が、まだ、26才の鷗外は21年に帰国したばかりで、紅葉・露伴・緑雨・漱石は20才、独歩・花袋・橋牛は17才、藤村・一葉は16才——という時代のこととて、人物の造型がいかにも図式的で単純だったのはやむをえない。小説理論など、なきにひとしかったのである。

だが、ともかく、20年前後は、近代小説胚胎の季節であると共に、女学生小説の最初の開花期でもあった。それ以後、「女学生（あがり）」は、明治小説史の欠かせぬ一要素となり、女性像の性格づけは、男性の主人公の態度・価値観・行動様式と、相互に規定し合う意味で、時代を描くために重要となり始める。

小説熱の高まりは、文芸雑誌がようやく活気を呈してきたことにも、表われている。20年には『国民之友』と『以良都女』が、21年には、回覧雑誌から市販に転じた『我楽多文庫』と『都の花』、22年には『新小説』（第一次）と『しがらみ草紙』が、創刊された。

だが、この時期の作に、すでに、欧化主義への批判が反映するように、20年の仮面舞踏会の醜聞や井上外交を転機として、鹿鳴館が斜陽化し始め、同じ年の『婦女鑑』下賜に続いて、21年には国風尊重の『日本人』誌が創刊され、23年に『教育勅語』発布、24年に内村鑑三不敬事件と相次ぎ、教育と風俗の「反動化」が始まった。20年前後は、その過渡期だったのである。

実は、この渦の中から、ようやく「閨秀」作家たちが登場する。その先駆けとなった二人の娘たちが、それぞれ維新の年と翌年の生れだったことも、偶然ながら、はなはだ象徴的なのである。（つづく）

註

- 1) 「所謂新しい女」（『逍遙選集』第8巻、大正15年、東京堂）
- 2) 山川菊栄『おんな二代の記』（昭和47年、平凡社）
- 3) 「ハイカラー及び新知識」（『日本人』明治33年12月、『明治文学全集』33巻）

明治の「生意気娘」たち（上）

- 4) 深谷昌志『増補・良妻賢母主義の教育』（昭和56年、黎明書房）
- 5) 国会図書館調査立法考査局編『明治以降教育文化の統計』（昭和32年）、日本女子大学女子教育研究所編『明治の女子教育』（昭和42年、国土社）
- 6) これらは未見だが、深谷の前掲書に依る。
- 7) 村上信彦『明治女性史』上巻（昭和44年、理論社）
- 8) 『日本婦人問題資料集成』第4巻（昭和51年、ドメス出版）
- 9) 宮内省蔵版（明治20年）序。
- 10) 深谷（前掲書）の算出に依る。
- 11) それらの趣意書の一部は（8）の資料にある。
- 12) 桑原三二『高等女学校の成立』（昭和57年、高山本店）
- 13) 唐沢富太郎『日本の女子学生』（昭和33年、講談社）
- 14) 宮城栄昌・大井ミノブ『新稿日本女性史』（昭和49年、吉川弘文館）
- 15) 青山なを『安井てつ伝』（昭和24年、岩波書店）
- 16) 唐沢の前掲書に、制服の変化が写真で示されている。
- 17) 植村清花「曙女史、木村栄子の伝」（『女学雑誌』237～8号、明治23年11月）
- 18) 桜井匡『教派別日本基督教史』（昭和8年、隆章閣）、松宮一也『日本基督教社会文化史』（昭和23年、新紀元社）、比屋根安定『日本プロテスタント九十年史』（昭和24年、日本基督教団）
- 19) 山口光朔「近代日本プロテスタント史と神戸女学院」（『神戸女学院百年史』、昭和56年、同学院）
- 20) 村上信彦、前掲書
- 21) 唐沢、前掲書に具体例が示されている。
- 22) 本間長世編『新大陸の女性たち』（『世界の女性史』9、昭和51年、評論社）
- 23) 平塚益徳『人物を中心とした女子教育史』（昭和40年、帝国地方行政学会）
- 24) 千野陽一『近代日本婦人教育史』（昭和49年、ドメス出版）
- 25) 青山なを『明治女学校の研究』（昭和45年、慶応通信）、野辺地清江『女性解放思想の源流をめぐって』（昭和59年、校倉書房）
- 26) 藤田美実『明治女学校の世界』（昭和59年、青英舎）
- 27) 岡野他家夫『出版文化史』（昭和29年、室町書房）
近代女性文化史研究会編『近代婦人雑誌総覧』（昭和60年、大空社）
- 28) 田口卯吉「女学の解」（『東京経済雑誌』421号、21年6月2日）、「女学記者と輿論記者」（同423号、明治21年6月16日）、全集第1巻所収。
- 29) 「女学の解」（『女学雑誌』111号、明治21年5月）
- 30) 明治女流作家の作品年表は、塩田良平『明治女流作家論』（昭和40年、文泉堂出版）

明治の「生意気娘」たち（上）

の末尾にある。

- 31) 巖本善治も「理想之佳人」を論じた。（『女学雑誌』104～8号、明治21年4月7日～5月5日）
- 32) 本間久雄「明治文学に現われたフェミニズム」（早稲田文学社編『明治大正文学研究』上、昭和4年、東京堂）、〃『婦人問題』（昭和22年、東京堂）
- 33) 政治小説の詳細なリストは、柳田泉『政治小説研究』（昭和10年、春秋社）、〃「政治小説の一般（二）」（『明治文学全集』第6巻）にある。
- 34) 「岸田俊子」時代の活動については『湘烟選集』第1巻（昭和60年、不二出版）
- 35) 村田静子『福田英子』（昭和34年、岩波書店）
- 36) 清水紫琴と福田英子の関係については、村上信彦の前掲書、中巻。村上は福田に対して、きびしい見方をしている。
- 37) 山川菊栄、前掲書
- 38) 「細君」（『女学雑誌』144号、明治22年1月12日）
- 39) 「批評」（同上、105号、明治21年4月14日）
- 40) 「くされ玉子」（同上、152号、明治22年3月9日）、「浮雲とくされ玉子」（同上、158号、明治22年4月20日）

Summary

The Insolent Daughters in the Meiji Era (I): The Girl Student and the Novel

Sampei Koseki

Jogakusei (the girls' school student) was one of the symbols of enlightenment and modernization in the Meiji Era. Naturally, many novelists described the various types of *jogakusei* and *jogakusei-agari* (the girls' school graduate). Analyzing these types, I attempt to illuminate the social situations surrounding them and their happiness or unhappiness.

Part I focuses on the development of female education and the dominant influences upon it, two of which are of primary importance: first, the *minken-undo*, or movement for the people's rights and liberty, from which the early feminist movement emerged; and, second, an ideal of personal independence and equality taught by the Protestant missionaries who founded many Christian girls' schools. *Jogakusei*, therefore, was a new phenomenon symbolizing westernization and progress.

Part II deals with the birth of the *Jogakusei Novel* at the end of the 1880s; this period was also the beginning of the modernization of novel writing characterized by realistic descriptions of the everyday life and psychology of the middle class. Readers can find there the conflicts between parents and their daughters and those among parents themselves. The period also saw the beginning of a nationalistic reaction against westernization in every sphere of social life. Its biggest symptoms

were the publication of a textbook on female ethics by the Empress's initiative in 1887, and the Imperial Rescript on Education in 1890.

It was in this transitional stage, filled with serious ambivalence, that the Japanese public read the first female novelists born at the beginning of the Meiji Era and recently graduated from Tokyo Jogakkō. Their works will be dealt with in a future article.